

## 16 三浦梅園『贅語』身生帙改稿過程研

### 究序説

#### —各稿本類の起稿・推敲年次の推定

近藤 均

体系的思想家三浦梅園（一七三三〜一八九九年）の医学説、とくに解剖・生理学説を正確に把握するには、第一主著『玄語』における「条理」や「反観合一」など彼独自の哲学概念を踏まえつつ、第二主著『贅語』（全六帙・漢文）の「身生帙」を精緻に解説する必要がある。先行研究者の小川鼎三・安西安周・服部敏良・吉田忠らは、いずれも『梅園全集』（一九二二年刊）に依拠しているが、これには誤植や校訂上の問題点が多く、いまや、『贅語』を梅園自身の最終稿本に遡って研究すべき段階にきている。しかも、『贅語』は一五回も改稿され（三浦黄鶴の証言）であり、今後は更に、梅園旧宅保存の膨大な自筆（一部他筆）稿本（多くは国指定重要文化財）によって、その改稿過程の解明にまで進む必要がある（ちなみに『玄語』に関して

は既に田口正治の精緻な研究業績がある）。

無論、杵築市立図書館所蔵の通称「杵築写本」や近年発見された東大所蔵の通称「駒場写本」に含まれる「身生帙」も重要資料である。今後の本格的な「身生帙」研究に向け、以上の、総計五〇万字に及ぶ「身生帙」各稿本類の起稿・推敲年次を推定しておく必要があるが、その推定結果を披瀝するのが当発表の主旨である。唯一の先行研究は阿部隆一『三浦梅園自筆稿本並旧蔵書解題』であるが、同書は、「駒場写本」を除く各稿本類の成立順序を簡単に指摘するにとどまり、しかも、前掲「杵築写本」の原稿を梅園早期の作と誤認する（実際は一七八一年以後の作）など、調査不備による重大な誤りも散見される。

現在、「駒場写本」以外の当該稿本類現物は閲覧が許可されていないので、解説は、慶応義塾大学附属研究所所蔵文庫と梅園学会事務局（東大教養学部小川晴久研究室）が所蔵する長大なマイクロフィルムに拠るほかはなかった。同フィルムは、白黒のため朱筆個所と墨筆個所を識別できないし、撮影漏れや撮影不鮮明の丁もあって、隔

靴搔痒の感を拭えないが、とにかく筆者は、一応の推定作業をほぼ終えた。その結果はかなり複雑である。

推定方法は以下の通り。各稿本類の、とくに見せ消ち部分と余白の書き込みとを丹念に判読した。また、語彙・文体の変遷はもちろん、「嗣」と「子」、「氤氳」と「網緼」など、表記の変遷にも注目した。こうして各稿本類の相對年代を一応確定したうえで、これらを、執筆年次が明白な『病機管見』（一七六三年）・『身生余譚』（六四年）・安永本『玄語』（七五年）・『造物余譚』（八一年）・『解蛇記』（八七年）、および、多賀墨卿宛のいわゆる第二・第三書簡（七九・八〇年）などの記述と比較し、それらの間に位置付けていった。また、梅園自身の読者ノート（いわゆる「浦子手記」）の記事も援用した。さらに、方以智『物理小識』・山脇東洋『蔵志』・河口信任『解屍編』・本木良意『和蘭全軀内外分合図』・杉田玄白ほか『解体約図』『解体新書』などからの影響の有無についても、個別に検討した。ただし、これらの多くは、刊行時期はわかるが梅園による入手時期の断定はかなり困難であるから、あくまでも副次的な利用にとどめた。

以上の方法により、推定作業をほぼ完了した。重要点を例示すると、阿部のいう14番稿本は八七年に起稿、没年まで推敲された。これは単に10番の改稿ではなく、一部分は7番の改稿である。また、阿部が最終稿本と定めた17番には、梅園自筆の書き入れは認められず、おそらく梅園死後の清書である。錯綜する詳細は、総会の席で一覽表を配布して報告した後、論文発表する。なお、筆者は既に、梅園生理学の基礎をなすユニークな経脈理論、いわゆる「資給経脈」理論について、その完成形態を、最終14番稿本に基づいて解明した（『梅園学会報』第一七号所収の拙稿参照）が、前述の推定作業の結果、その「資給経脈」理論の形成過程も明らかになったことを付記しておく（以上敬称略）。

（順天堂医療短期大学）